

主張し行動する世代の一人として

3月13日付朝日新聞夕刊に「あのときそれから 東大安田講堂事件」という記事が掲載された。その中で、1月12日に同講堂で開かれた在宅医療のシンポジウムに

り方を根源的に問うという発想がありました」と述べている。そして話は50年前にさかのぼる。

だいた堂垂伸治先生は、その実行委員長として記事の中にも出ていた。

「2019 団塊・君たち・未来」と題されたそのシンポジウム(在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク主催)の模様はすでに冊子にまとめられている。冊子の「はじめに」の中で、堂垂先生は「団塊の世代は」「主張し行動する大量の若者たち」でした。

■ 東大闘争の中で 1960年代後半、熱い政治の時代、学生運動は頂点に達していた。全共闘の一人として、その真只中に堂垂先生もいた。

「東大工学部で自治委員をやっていました」と話す先生。68年、新たに祝日となった建国記念の日には、戦前の紀元節の復活だ、としてクラス討論を行い自主登校。9月には工学部で1000人規模の学生大会を行いストライキ、そして翌年1

月の安田講堂「攻防戦」に至っていく。「当日、私は安田講堂の中にはいなくて、『街頭闘争』でした」と話す先生、「やりきった、という思いはない」と当時を振り返る。そして次の道を模索することになった。

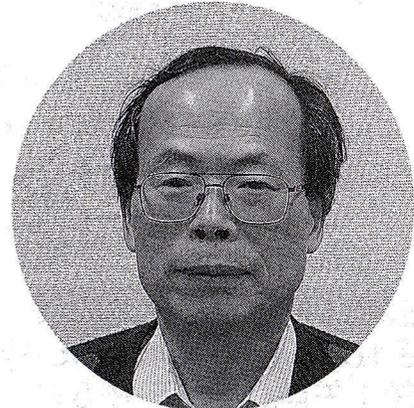
「カルテの復習」という言葉が出た。毎日のカルテをその日に見直し「この患者をどうするか」を考えて次の診療へつなげている。地域医療へも貢献し、松戸市内の高齢者向け電話安否確認サービス「あんしん電話」の構築も手がけてきた。

■ 千葉大医学部へ 東大卒業後、大手自動車メーカーの下請けで工場労働者となるも、1年半で退職。友人らのアドバイスと、それまでの勉強が「錆びついていた」こともあり、千葉大医学部へと進学した。

《略歴》

昭和23年3月11日生まれ。富山県出身。昭和50年東京大学工学部航空学科卒。昭和60年千葉大学医学部卒。同年4月、千葉大学医学部第3内科所属、昭和62年4月以降、社会保険東病院・千葉県救急医療センター、羽生病院勤務。平成2年2月から千葉西総合病院勤務。平成11年1月、松戸市内にどうたれ内科診療所開業。千葉大学医学部臨床教授。

こんにちは

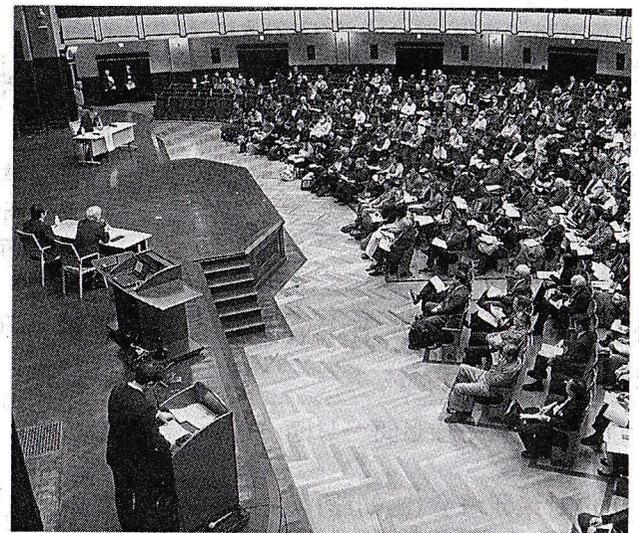


どうたれ しんじ 堂垂 伸治 先生

会員をたずねて 272

■ 千葉大医学部へ 東大卒業後、大手自動車メーカーの下請けで工場労働者となるも、1年半で退職。友人らのアドバイスと、それまでの勉強が「錆びついていた」こともあり、千葉大医学部へと進学した。卒業後、千葉西総合病院の開設の時から関わり、病院では地域医療部長としても50人ぐらいの在宅患者を診ていた。そして99年、松戸市内で開業した。

■ 団塊の世代として そうした先生の、今の若い先生方に向ける目は厳しい。「患者の訴えに対し冷静な目で分析を」、「患者への共感力が少なくなっているのは」「等々。その目は現代社会へも。「子どもを育てづらい社会になっっている」、「反戦平和を守るには、小異を捨て大同につく、手を携えての大連合が必要」と、その思いはとどまるところを知らない、団塊世代の一人である。



東大・安田講堂で開かれた在宅医療のシンポジウム。当日は全国から500人ほどが集まった=1月12日

■ 日々、カルテの復習